

# 小林市教育研究センター

I	研究主題と副題	7-1
II	主題設定の理由	7-1
III	研究目標	7-1
IV	研究仮説	7-1
V	研究の全体構想	7-2
VI	研究内容	7-3
1	研究の基本的な考え方	
(1)	教職員の実態・意識調査の分析	
(2)	本研究センターが目指す授業（小林市ならではの授業）と確かな学力	
2	系統的な指導	7-4
(1)	T S Mの活用場面や活用方法	
(2)	T S Mの改善と拡充	
3	活用型授業づくり研究	7-5
(1)	単元構成の基本型づくり	
(2)	知識や技能を活用する言語活動の位置付け方	
(3)	B問題分析を生かした学習問題及び課題設定の工夫	
4	検証授業の実際	7-6
(1)	検証授業の視点	
(2)	検証授業 I (中学校第2学年数学科 単元名「図形の調べ方」)	
(3)	検証授業 II (小学校第6学年社会科 単元名「新しい日本、平和な日本へ」)	7-7
5	研究内容の普及促進に向けた取組	7-9
(1)	教職員の実態・意識調査分析	
(2)	既存の取組活用	
(3)	研究センター通信の効果的な配信と活用	
VII	成果と課題	7-10
1	成果	
2	課題	

【引用・参考文献】

【研究同人】

## I 研究主題と副題

### 確かな学力を育成するための小林市ならではの授業の創造

小中一貫教育における系統的な指導の充実と知識・技能を活用する授業づくりの実践化を通して

## II 主題設定の理由

平成20年3月に告示された新学習指導要領が、小・中学校で全面実施となり2年目を迎えた。その基本理念として児童生徒の「生きる力」をよりいっそう育むことを目指し、知識や技能の習得とともに、思考力・判断力・表現力などの育成を重視することが示されている。

本市においては、自ら目標をもち、未来をたくましく生きぬく児童生徒を育成することを目指し、「知・徳・体・食」のバランスのとれた教育活動を推進し、平成21年度からは連携型の小中一貫教育を全小・中学校で実施してきた。これまで、研究指定校を核とした指導方法・指導体制及び環境整備等の工夫改善や、教育フォーラム等による市内全教職員参加型の研修により、「徳・体・食」育に関しては一定の成果を見ることができた。また、「知」育に関しても様々な研修環境が整い、「目指せ宮崎県一、小林の学力」をスローガンの一つに掲げ、市内教職員一丸となって日々の実践に取り組んでいる。

しかし、ここ数年の各種学力調査の結果からは緩やかな上昇傾向が見られるものの、県の学力調査では県平均を下回る教科があり、全国学力・学習状況調査では、主として「活用」に関する問題（B問題）において全国平均をやや下回る傾向が続いている。その要因として、9年間を見通した系統的な指導が意識されず、基礎的・基本的な知識及び技能の定着を図る指導やそれらを活用させる学習活動が十分に行われてこなかったり、各種の研修の成果を生かした授業レベルでの実践が、継続的に行われていなかったりしたことが考えられる。

そこで、本研究センターでは、これらの経緯をふまえて市の教育上の課題を解決するために、昨年より学力向上に焦点を絞って研究を進めることとした。まず、「系統的指導研究班」において9年間を見通した系統性・一貫性のある学習指導に役立たせるための資料等を作成した。また、「活用型授業づくり研究班」において問題解決的な学習指導過程を基軸とし、知識・技能を活用する学習活動を充実させた小林市ならではの基本的な授業スタイルを提案することができた。さらに本年度は、昨年までの研究をさらに充実、発展させるとともに、研究内容を普及、浸透させるために新たに「授業改善普及班」を設け、小林市内の全小・中学校教職員の授業力向上と児童生徒の学力向上に向けて、理論的かつ実践的な研究に取り組んでいくことにした。

これら3つの班の取組を充実させ、組織的・体系的に研究を進めていくことで、児童生徒の確かな学力を育成する小林市ならではの授業が創造でき、本市の掲げる「夢と元気と勇気ある小林教育」の具現化を目指すことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

## III 研究目標

児童生徒の確かな学力の育成を目指して、小林市の児童生徒の学力の現状をとらえ、基礎的・基本的な知識及び技能を活用する学習活動を中核とした小林市ならではの授業を創造する。

## IV 研究仮説

小中一貫教育のよさを生かしながら次のような研究をすることで、小林市ならではの授業の創造ができ、児童生徒の確かな学力を向上させることができるであろう。

- (1) TSM<sup>※</sup>の有効活用に向けた実践検証と内容の改善及び普及に向けた取組
- (2) 活用型授業を効果的に行うための単元構成及び言語活動の位置付け方、課題設定の工夫
- (3) 教職員の実態・意識調査等の実施・分析及び研究内容の市内全教職員への戦略的な普及促進

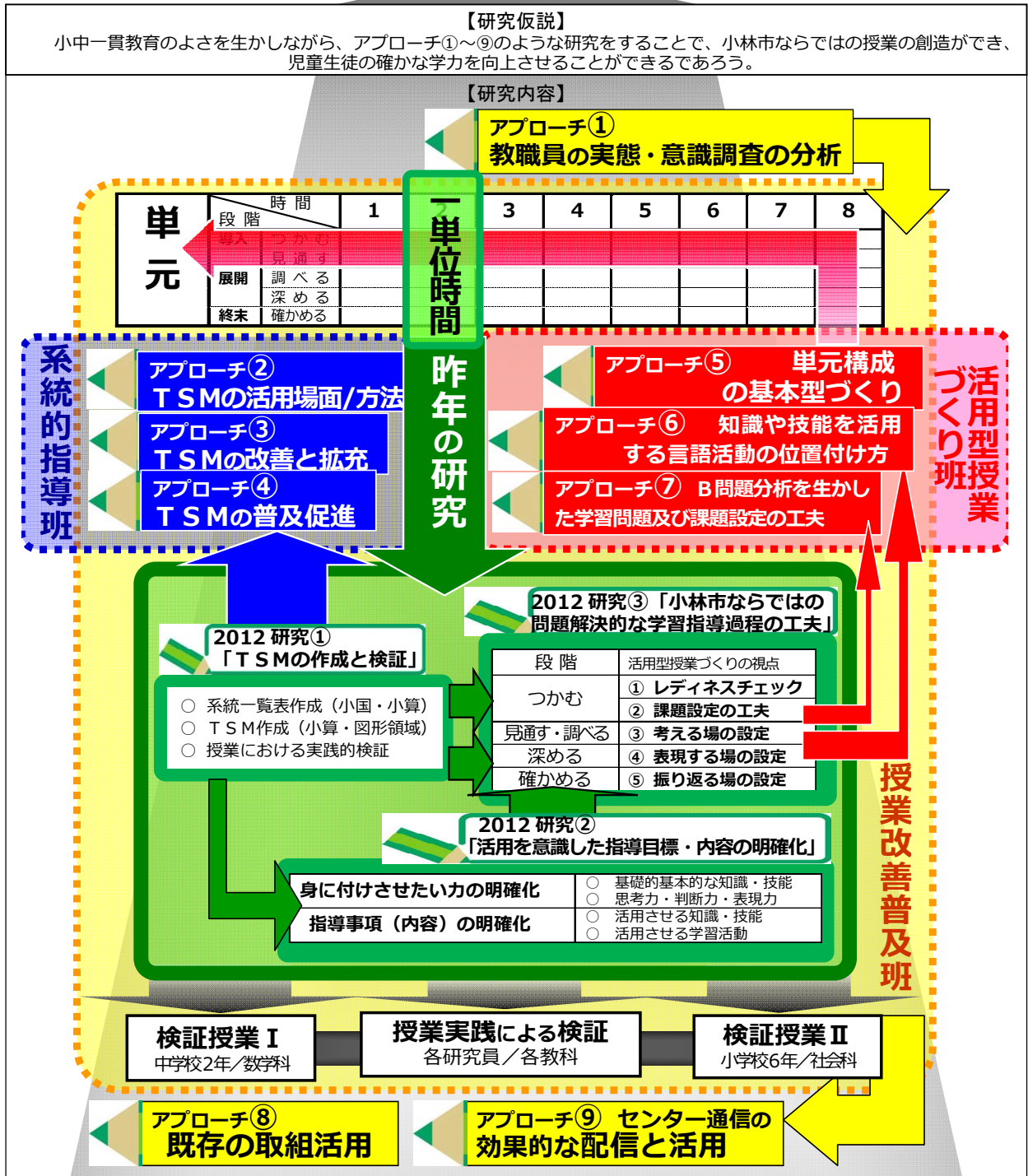
※ TSMとは、昨年度、本研究センターが独自に開発した資料(Teachers' Skill Up Method)の頭文字をとったもの。基礎的な知識や技能を確実に習得させるための授業における手立てのひとつで、当該単元に関わる9年間の内容の系統等が分かるようにした。

V 研究の全体構想

【研究主題・副題】

**確かな学力を育成するための小林市ならではの授業の創造**

小中一貫教育における系統的な指導の充実と知識・技能を活用する授業づくりの実践化を通して



【小林市の児童生徒の実態から】

- ・平成 21 年度から小中一貫教育の推進等により徳、体、食は一定の成果
- ・みやざき学力・意識調査では県平均を下回る教科あり
- ・全国学力・学習状況調査の「活用」に関する問題（B問題）に課題

【社会的な背景から】

- ・知識基盤社会化やグローバル化
- ・「生きる力」を育む重要性
- ・国内外の学力調査による思考力・判断力・表現力等の課題

【宮崎県の教育から】

- ・確かな学力を育む教育の推進（第二次宮崎県教育振興基本計画）

【新学習指導要領から】

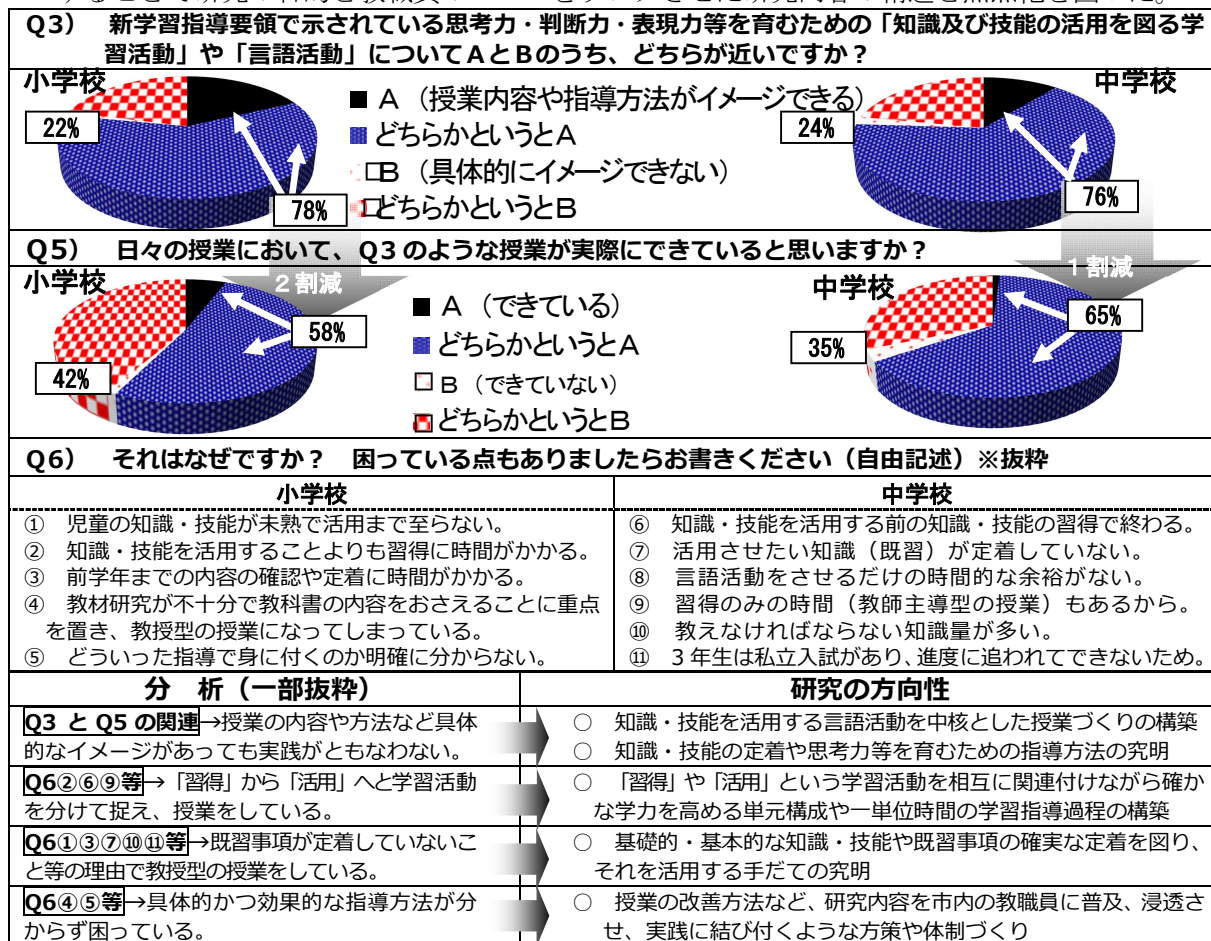
- ・知識・技能の確実な習得と思考力・判断力・表現力の育成
- ・知識・技能の活用を図る学習活動と言語活動の充実

## VI 研究内容

### 1 研究の基本的な考え方

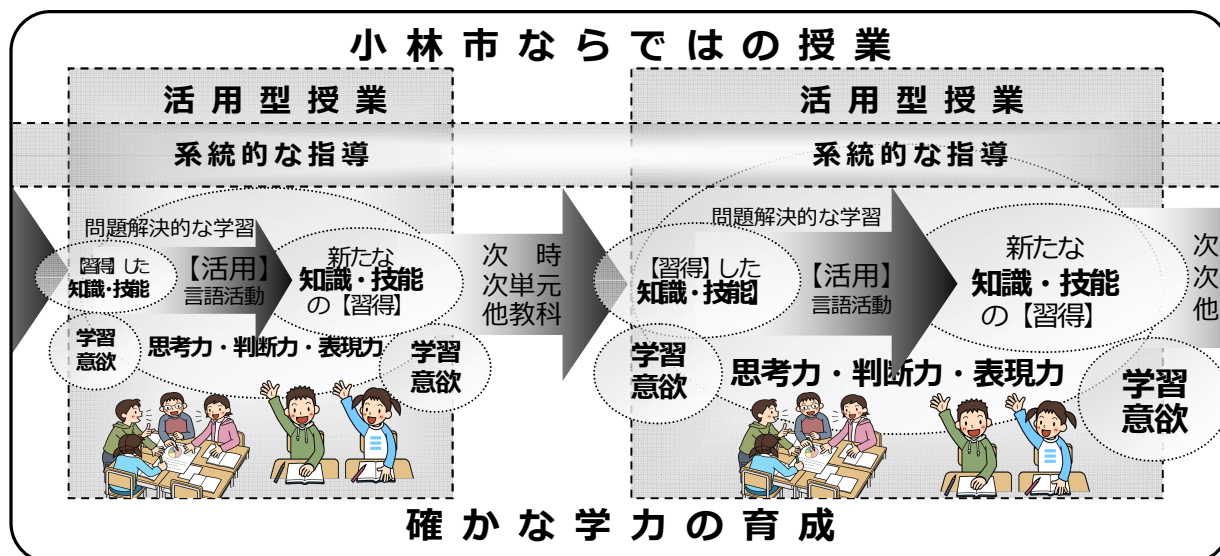
#### (1) 教職員の実態・意識調査の分析（アプローチ①）

児童生徒の確かな学力を育成するための授業を構想するにあたり、まず、授業の実践者である市内全小・中学校教職員の実態・意識調査（42項目）を実施した。そして、調査結果を分析することで研究の目的と教職員のニーズをリンクさせた研究内容の精選と焦点化を図った。



#### (2) 本研究センターが目指す授業（小林市ならではの授業）と確かな学力

本研究センターが目指す授業は、系統的な指導を充実させ、問題解決的な学習の中で習得した知識・技能を活用する言語活動の充実を図るものである。このような授業を行うことにより、思考力・判断力・表現力が育まれる中で新たな知識・技能が習得され、その知識・技能は、次時、あるいは次単元や他教科において意欲的かつ主体的に活用され、確かな学力が育まれると考える。

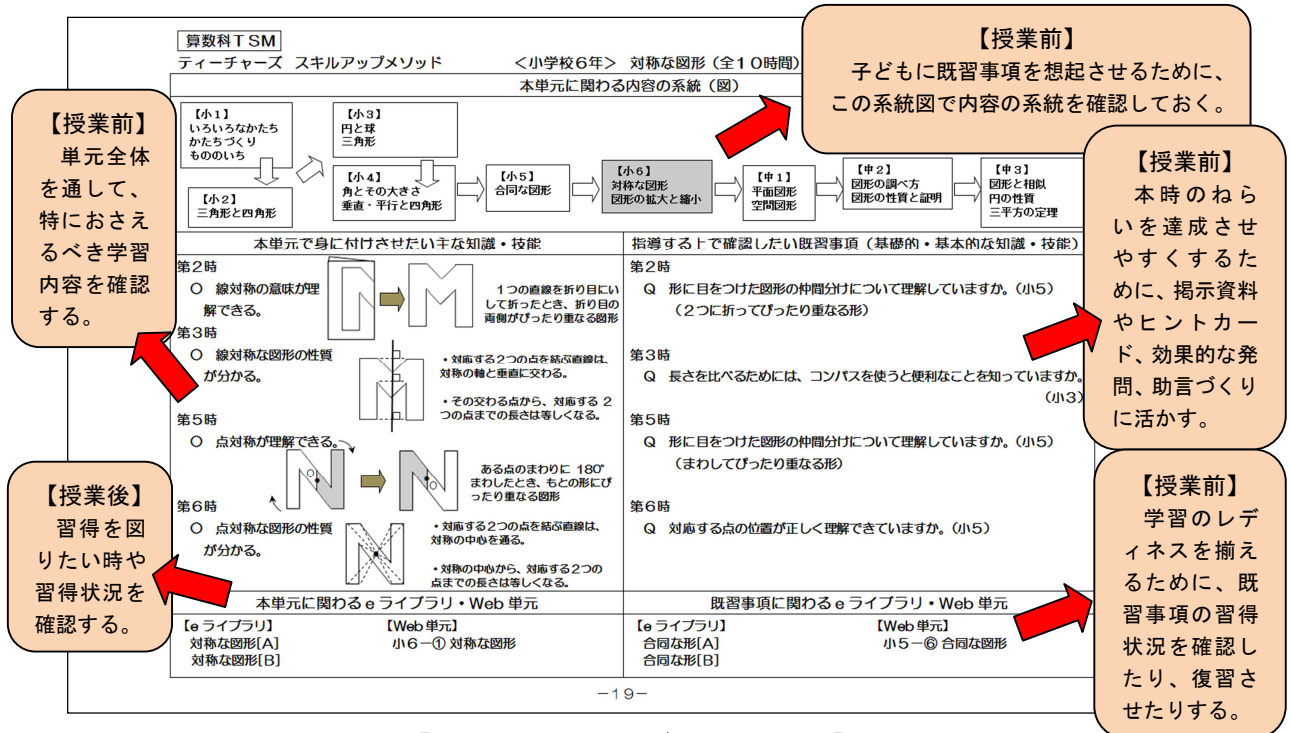


## 2 系統的な指導

児童生徒が身に付けるべき知識及び技能や学習内容のつながり（系統性）については、授業構想の段階から、教師側がしっかりと把握しておく必要がある。昨年度の研究では、本市全小・中学校で実施された標準学力検査（NRT）の結果分析から課題となった、国語科（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）と算数科（図形領域）においてTSMを作成した。そして、そのTSMを活用することで授業者は、小・中9か年間の学習内容を系統的に見通すことができ、基礎的・基本的な知識及び技能を活用した授業づくりができるということが分かった。

### (1) TSMの活用場面や活用方法（アプローチ②、アプローチ④）

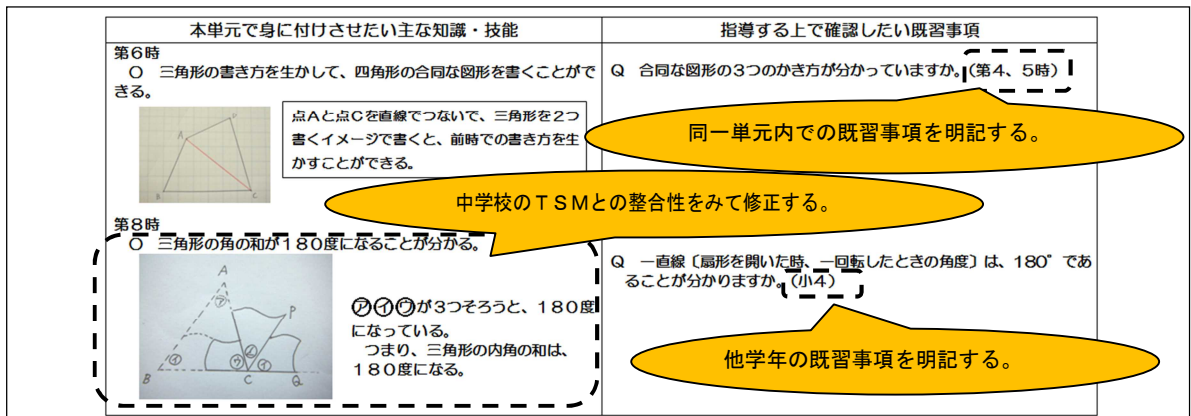
昨年度の研究では、TSMを実際の授業のどの場面で、どのように活用していくのかを整理しておく必要があるという課題が明らかになった。そこで本年度は、活用型授業でTSMをより効果的に活用していくために、授業場面ごとに活用方法を整理した。さらに、それらの活用効果を授業実践を通して検証した。（詳細はp.7-6参照）また、今後、TSMの活用方法を市内の教職員に理解し活用してもらうために、「利用マニュアル」も作成した。



### (2) TSMの改善と拡充（アプローチ③）

本年度は、授業者が学習内容のつながりをより意識して指導にあたるようにした。小学校算数科TSMに加えて、中学校数学科（図形領域）のTSMの作成を行い、小・中9か年間で学習する内容のつながりがより見えるよう資料の拡充を行った。

また、「指導する上で確認したい既習事項」の欄に、同一単元内での既習事項や他学年の既習事項を明記するなど、内容の改善を行った。



【小学校TSM：小学校5学年（一部）と内容の改善】

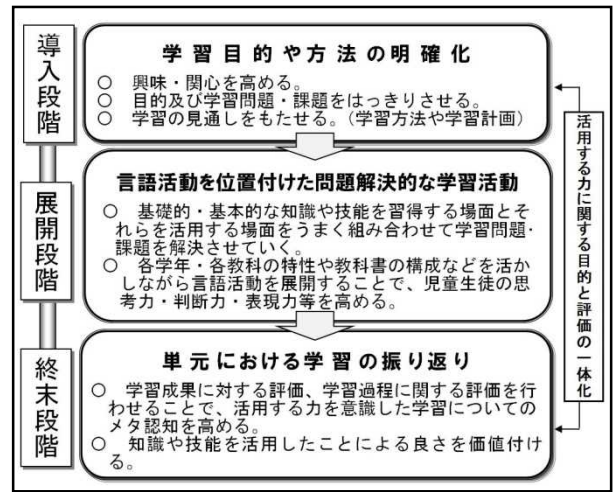
### 3 活用型授業づくり研究

昨年度の研究において、活用型授業の学習指導過程が完成した。本年度はこの学習指導過程を使った授業が更に充実するよう次の工夫改善を行った。

#### (1) 単元構成の基本型づくり (アプローチ⑤)

活用型授業をより効果的に行うために、小・中学校9か年の全教科を網羅できる単元構成の基本型を作成した。作成にあたっては学校種や各教科の特性などを踏まえつつ、より汎用性が高まるものを目指した。

単元構成の基本型では、導入段階で、思考力・判断力・表現力の育成を目指すための学習の目的や課題を示し、児童・生徒に学習の見通しをもたせることに重点を置いている。また、終末段階では知識や技能を活用する視点からの振り返りを行う場を設定することで、導入段階で確認した学習目的や方法と対応させた自己評価を行えるようにした。このように単元構成の基本型を設定することで、どの教科においても知識や技能を活用して課題を解決する単元の流れが明確になり、この基盤の上に各時間の活用型授業が構築できるようになった。

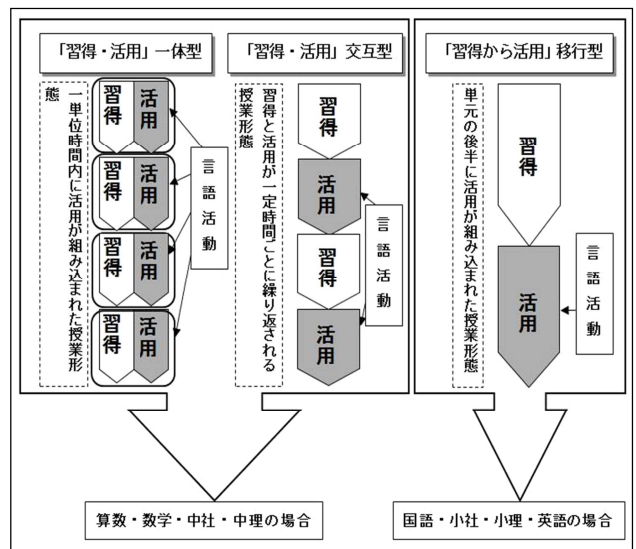


【単元構成の基本型】

#### (2) 知識や技能を活用する言語活動の位置付け方 (アプローチ⑥)

活用型授業が単元のどこに位置付けられるのかを明確にしておくことは、思考力・判断力・表現力を育てる言語活動の位置付け方を考える上で重要である。そこで、各教科の教科書を分析して、基礎的・基本的な知識や技能の習得と活用の場面を整理した。これらのパターンを参照しながら単元指導計画や一単位時間の授業計画を見直すことで、思考力・判断力・表現力を育成するための指導の重点化が図られると考えた。

実際には、毎時間の授業後半に知識や技能を活用させる課題が出てくる算数・数学のような教科と単元後半に出てくる国語や社会のような教科等を分類して、それに合った指導計画を作成し、各授業の言語活動を工夫するようにした。

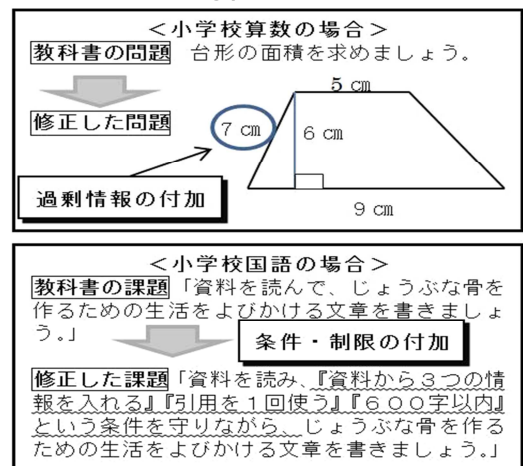


【習得と活用の場面整理と言語活動の設定】

#### (3) B問題分析を生かした学習問題及び課題設定の工夫 (アプローチ⑦)

「全国学力・学習状況調査」のB問題を分析した結果、学習問題及び課題設定の仕方に授業改善のポイントがあることが明らかになった。そこで、国語と算数・数学については「過剰情報の付加」と「条件・制限の付加」を観点にした7つの学習問題及び課題設定パターンをまとめ、教科書の問題・課題のチェック及び修正を行っていくことにした。

このような視点が明確になったことで、他教科の問題・課題設定においても、表記を変更したり、使用資料の着眼点を変えたりする工夫が生まれ、活用型授業がより充実するものとなった。



【教科書の問題・課題の修正】

#### 4 検証授業の実際

系統的指導班と活用型授業づくり班の理論を検証し、実践化に向けてのために研究内容をリンクさせた検証授業を行った。ここでは、授業構想段階から授業づくりチームを再編し、それぞれの班の研究内容が反映されるよう組織的な工夫をした。また、授業は本研究センターが作成した問題解決的な学習指導過程（詳細は p. 7-2 「研究の全体構想図」参照）に基づき、以下のような視点を踏まえて実施した。

##### (1) 検証授業の視点

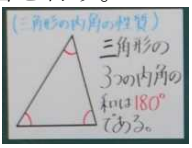

###### ア 検証授業Ⅰ（中学校第2学年数学科 単元名「図形の調べ方」）

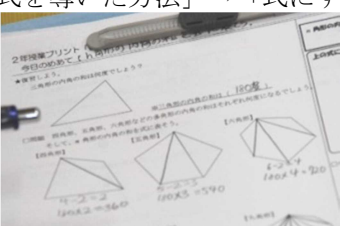
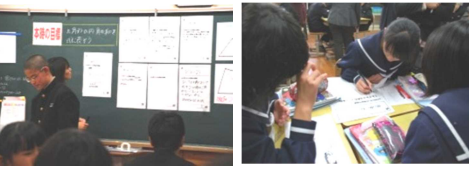

<b>視点1</b>	TSMで本時に関わる既習事項を確認し、生徒のレディネスを揃える手立てをとることで、生徒が既習事項を活用しながら主体的に課題解決を行うことができるか。 <span style="float: right;">▶ <b>アプローチ②</b></span>
<b>視点2</b>	既習事項を問題解決場面で活かせるような言語活動を取り入れることで、生徒の思考力・判断力・表現力を高めることができるか。 <span style="float: right;">▶ <b>アプローチ⑥</b></span>

###### イ 検証授業Ⅱ（小学校第6学年社会科 単元名「新しい日本、平和な日本へ」）

<b>視点1</b>	前単元の内容を想起させ、整理させる導入を行うことで、児童のレディネスが揃い、「調べる・深める」段階での学習活動が効果的に進むか。
<b>視点2</b>	学習問題及び課題設定パターンを活用して条件を付加した課題を設定することで、児童が深い課題意識をもって思考・表現するようになるか。 <span style="float: right;">▶ <b>アプローチ⑦</b></span>

##### (2) 検証授業Ⅰ（中学校第2学年数学科 単元名「図形の調べ方」）




<b>単元における言語活動の位置付け方</b>		<b>「習得・活用」一体型（全16時間）</b>
本時の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 多角形の内角の和を式で表すことができる。</li> <li>○ 三角形の数をもとにしながら、n角形の内角の和について帰納的に考えることができる。</li> </ul>		
段階	学習活動の実際	活用型授業づくりの視点に立った考察
授業前 構想段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ TSM「本単元に関わる内容の系統図」から、学習内容の系統性を確認した。</li> <li>○ 本時で身に付けさせたい知識や技能とそれに関わる既習事項を確認した。</li> </ul>	<b>視点1</b>
つかむ	<p>1 前時までの復習を行う。</p>  <p>2 本時の問題を理解する。</p> <p><b>【問題】</b> 四角形、五角形、六角形…二十角形などの多角形の内角の和は、それぞれ何度になるでしょう。</p>  <p>3 学習課題（めあて）について確認する。</p> <p><b>【学習課題（めあて）】</b> n角形の内角の和を式に表そう。</p>	<p style="text-align: center;"><b>①レディネスチェック</b> <span style="float: right;"><b>視点1</b></span></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ TSMに記載されている知識・技能「三角形の内角の和」、「1つの頂点から対角線を引く」の復習をすることで、本時の学習課題を解決するためのレディネスを揃えることができた。</li> </ul> <p style="text-align: center;"><b>②課題設定の工夫</b> <span style="float: right;">▶ <b>アプローチ⑦</b></span></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教科書には、「四角形の内角の和は何度になるでしょう」という比較的容易な問題が示されていた。これを「七角形」、「八角形」…「二十角形では？」という問題に修正した（過剰情報の付加）。その後、教師が二十角形の内角の和を簡単に求めてみせたことで、生徒に「式を作ることで求められるのではないか」という解決の見通しをもたせることができた。これによって、知的好奇心や解決意欲を高めることにつながり、その後の活動にも目的意識をもって取り組ませることができた。</li> </ul>

見通す	4 見通しをもつ。(方法の見通し) 5 個人で調べる。 「式を導いた方法」→「式にする」 	<b>③考える場（活用場面）</b> <span style="float: right;"><b>視点1</b></span> ○ レディネスチェックで、レディネス（1つの頂点から対角線を引く）を揃えたことで、生徒が解決の見通しをもち、自力解決への意欲を高めることができた。 ○ めあての達成に向けて、その理由や根拠を明確にもつように指示したことで、内角の和の規則性に注目させることができ、生徒は帰納的に考えられるようになった。
	調べる 6 集団で話し合い、発表する。 (3～4人グループ→全体) <話し合いの視点> ・どんな式になるか。 ・その式になった理由や根拠は何か。 	<b>③考える場と④表現する場（活用場面）の設定</b> <span style="float: right;"><b>視点2</b></span> ○ 個人思考の時間を十分にとった後、集団での話し合い（3～4人グループ→全体）の時間を設定したことで、生徒は、めあての達成に向けて、既習事項を活かして主体的に思考、表現したり、他の生徒の考えや意見を取り入れたりするなど活発な意見交換をした。求めた式が同じでも、理由や根拠の書き方にいろいろな意見が出されるなど、集団での話し合いが活発に行われ、すべての班がn角形の内角の和の式を導き出すことができた。
深める	7 まとめをする。 【まとめ】 n角形の内角の和は、 $180^\circ \times (n-2)$ である。	<b>③考える場と④表現する場（活用場面）の設定</b> ○ 既習の多角形だけでなく、二十角形の内角の和についても、1つの頂点から対角線を引いて作られた三角形の数によって、その内角の和が $180^\circ \times (20-2)$ で求められることを確認し、生徒が集団での話し合いによって導き出した式 $180^\circ \times (n-2)$ の有用性を実感させ、理解を深めさせた。
確かめる	8 問3、問4を解く。 9 本時を振り返る。 	<b>⑤振り返る場の設定</b> ○ 本時で習得した式 $180^\circ \times (n-2)$ を活用して問題を解かせ、習得した知識が活用できることを実感させた。 ○ e-ライブラリを利用して本時の学習内容をを用いた問題を解かせ、知識の定着を図った。

(3) 検証授業Ⅱ（小学校第6学年社会科 単元名「新しい日本、平和な日本へ」）

<b>単元における言語活動の位置付け方</b>		<b>アプローチ⑤</b> 「習得から活用」移行型（全5時間）	<b>アプローチ⑥</b>
学習目的や方法の明確化	<b>第1時</b> ○ 「これからの日本はどのような国づくりを目指して行くべきか」を考えることをゴールにして学習問題と学習計画を立てる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">戦争が終わってから、どのようなことがあり日本はどのように変わっていったのでしょうか。</div>	○ 2020年に2度目の東京オリンピック開催が決まった。東日本大震災からの復興と再生を目指し、日本がこれからどんな国になるかを世界にアピールする場ともなりえる。これを踏まえた上で、学習のゴールを確認した。 ○ 教科書 p.140 の3つの写真を見せ、各時代における世の中の様子の変化に着目させ、本単元への導入を図った。	
	<b>第2時（本時）</b> 本時の目標 ○ 各種の資料から、戦後の日本では様々な改革が行われ、民主的で平和的な国づくりが進められたことを調べて理解する。		
言語活動を位置付けた問題解決的な学習	段階	<b>活用型授業づくりの視点に立った考察</b>	
	学習活動の実際	1 戦後の選挙の様子の写真を見て、戦前との違いについて考えさせる。 2 戦前の憲法、教育について確認する。 3 本時のめあてを設定する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">戦後、日本ではどのような国づくりが進められたのか調べよう。</div>	<b>①レディネスチェック</b> <span style="float: right;"><b>視点1</b></span> ○ 戦後の選挙の写真を見せながら、戦前に制定された選挙制度との相違点を確認することで、レディネスを揃えた。 <b>②課題設定の工夫</b> <span style="float: right;"><b>視点2</b></span> ○ 教科書では本時の課題が「戦後、日本ではどのような改革が行われていたのだろうか」となっていた。これを課題設定のパターンを活用して、表記のように修正した。これにより、戦後改革の個々の事象を関連・統合する思考によって問題解決を図っていくという課題意識をもたせることができた。



見通す	<p>4 どのような国づくりが行われたのか予想し、見通しをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 予想             <ul style="list-style-type: none"> <li>・豊かな国づくり</li> <li>・平等な国づくり</li> <li>・平和で活気のある国づくり</li> </ul> </li> </ul> <p>5 戦後に行われた改革と、それが戦前とどう変わったのかを調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 個人で調べる。→全体で確認する。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・選挙制度→男女平等になり、女性にも選挙権が認められた。</li> <li>・憲法→日本国憲法となり、国民主権となった。 戦争を認めない。民主的になった。</li> <li>・教育→男女共学、6・3制になった。 戦争のことは教えなくなった。</li> </ul> </li> </ul>	<p><b>③考える場（活用場面）の設定</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 既習の知識をもとに予想をさせた。その予想が、その後の調べる活動につながり、問題解決への意欲を高めることとなった。</li> </ul>
調べる	<p>6 改革の目的を、戦前と比較しながら考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 一人で→小グループ（3～4人）</li> </ul>   <p>7 全体で確認する。</p> <p>8 それぞれのグループで出てきた意見をもとに、全体でまとめをする。</p>  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>戦後、日本では平和で平等な（民主主義など）社会を目指して国づくりが進められた。</p> </div>	<p><b>③考える場（活用場面）の設定 視点1</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 戦前との比較思考で改革を捉えさせるよう発問を工夫した。調べる内容を3つ（選挙制度・憲法・教育）に絞り、戦前と戦後のしきみを比較させることで、変化した内容が明確になり、まとめやすくなった。</li> </ul>
深める	<p>9 本時の学習内容を確認する。</p>	<p><b>③考える場（活用場面）の設定 視点1</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 戦前と比較しながら考えるという条件を課し、本単元以前に身に付けた知識を活用する場を設定した。比較した項目を整理しながらノートにまとめさせることで、戦後日本のキーワードとなる「平和」「豊か」「民主的」という言葉を児童から引き出すことができた。</li> </ul>
確かめる		<p><b>④表現する場（活用場面）の設定 視点2</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 調べた内容を自分の言葉でまとめさせることで、内容を整理・統合させることをねらいつたが、時間が確保できず十分な効果が得られなかった。</li> </ul> <p><b>⑤振り返る場の設定</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 既習の知識を活用して問題を解決したことを振り返ることで、活用することの良さを意識させた。</li> </ul>

- 第3時** ○ 日本が国際社会への復帰を果たす前後の世界の動きや日本の様子について調べる。
- 第4時** ○ 東京オリンピック開催の様子や当時の人々の気持ちについて調べる。  
○ 東京オリンピック開催前後の国民の生活の変化について調べる。

- 第5時** ○ 戦後の日本の歩みを振り返らせながら、「これからの日本はどのような国を目指していけばよいか」について話し合う。 アプローチ⑥
- 学習問題解決のための言語活動を振り返ることで、身に付いた力を確かめる。

**児童の振り返りより:**

- 教科書を読み取ることが身に付いた。また、比較してみるという考え方が身に付いた。例えば、写真を比較してみるなど。

**児童の振り返りより:**

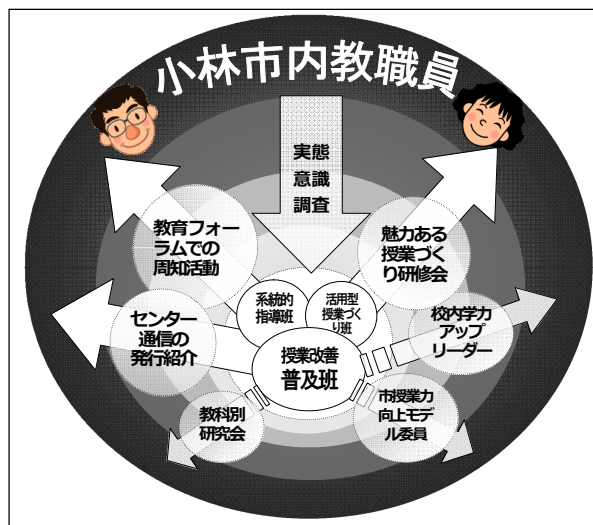
- 授業では、戦前の日本の様子を思い出ししながら、戦後これからは平和な日本を維持させていくことを考えて、犯罪のない日本を目指す自分なりにまとめました。

## 5 研究内容の普及促進に向けた取組

昨年度の研究から、本研究センターの研究内容を普及させることが課題の一つとして浮かび上がった。そこで、教職員が求めている指導方法や教育的課題は何かを探るために、市内全小・中学校教職員を対象に、実態・意識のアンケート調査を行った。さらに、その調査結果を反映させた研究について、市内全小・中学校教職員に普及・浸透させ、各学校での実践につなげるために次のような取組を行った。

### (1) 教職員の实態・意識調査分析（アプローチ①）

アンケートでは、児童生徒の学力向上に向けた授業実践の状況や研究センターの研究内容の理解度を質問した。分析の結果から、研究センターの研究内容が普及しない原因として、「研究の内容や活用の仕方が理解されていない」「研究内容を知る機会がない」等が明らかになり、それらの課題を解決する方策を立てる必要があることが確認できた。そこで、研究を普及させるための構想を立て、研究内容の普及促進に向けた取組を行うこととした。



【普及促進に向けての構想図】

### (2) 既存の取組活用（アプローチ⑧）

研究内容を広く普及させ、その活用を促すために、本市教育委員会主催で行われる研修会等を活用することが効果的であり、即効性があるのではないかと考えた。そこで、市内全小・中学校教職員対象に行われる「教育フォーラム」で、会場の参加者に研究内容や取組状況を伝えるための場を確保した。ここでは、本研究センターの紹介動画（10分）を放映するとともに、研究員が補足説明を行うことで、研究の目的や方法、内容等の周知を目指した。また、「魅力ある授業づくり研修会」で、代表研究員が学力向上分科会の講師を務め、受講者の授業改善と研究内容の普及や実践化を目的に講義演習を行った。



【講義・演習の様子】

講義では、本研究センターの全国学力・学習状況調査の分析と考察を示し、授業改善の必要性を説いた。さらに演習では、小学校第4学年の算数（図形領域単元）の模擬授業を例に、「確かな学力」を身に付けさせるための授業づくりを提案した。具体的には、「TSMの活用」「活用型授業づくりの視点」を取り入れながら、受講者に実際の担当学年単元の授業構想を立てさせ、実践に結び付くようにした。

### (3) 研究センター通信の効果的な配信と活用（アプローチ⑨）

本研究センターの取組を市内の全ての教職員が容易に理解でき、実践化に結び付けるためにセンター通信を作成し配布した。第1号は、全教職員に確実に配布し、目にしてもらおうことをねらい、教育フォーラムの配布資料にチラシとして折り込んだ。2号以降は、市内のイントラネットを使って各校に配信し、校内に掲示することで日常的かつ視覚的に本研究センターの取組が周知されることをねらった。更に、通信内容をより確実に全教職員に浸透させるために、各校の研究員が通信をもとに職員研修等の場で取組を紹介し、校内研究や授業実践に取り入れてもらうことを目指した。

号(月)	内 容
1(6・7)	3班の研究内容紹介
2(9)	魅力ある授業づくり研修会の内容紹介
3(10)	アンケート結果/研究の進捗状況紹介
4(11)	数学科検証授業の実際と考察
5(12)	社会科検証授業の実際と考察



【校内での研究員の普及活動】

## VII 成果と課題

### 1 成果

- 中学校数学科（図形領域）のTSMを作成したことによって、算数・数学科図形領域については、小・中学校9か年間の学習のつながりがより見えるようになった。また、TSMの活用場面や方法を整理したことで、授業者が、学習内容の系統をより意識して授業を構想、展開することができるようになった。
- 単元構成の基本型や言語活動の位置付け方を整理することにより、単元レベルで活用型授業を構築できるようになった。また、学習問題及び課題の設定パターンを明らかにすることで、活用型授業がより充実するようになった。
- 教職員の意識・実態調査から普及のための課題を明確にすることができた。また、市の既存の取組を活用したり、市内全教職員向けに研究通信を発行したりしたことにより、研究内容の周知を図ることができた。

### 2 課題

- 系統的な指導についての理論研究を重ねるとともに、TSMを授業でより活用しやすいものに改善したり、他の系統的な指導方法も究明したりしていく必要がある。
- 単元構成の基本型をもとにした指導計画による一単位時間の活用型授業への効果を更に検証したり、学習問題及び課題の設定パターン例を作成して、それらを各教科・単元における授業づくりにいかせるようにしたりする必要がある。
- 市内の教職員のだれもが活用型授業を実践できるように、「市教科部研究会」や「市授業力向上モデル委員」、「校内学力アップリーダー」など既存の組織の活用を図っていく必要がある。

#### 【引用・参考文献】

- ・『小学校学習指導要領』株式会社東洋館出版社
- ・『中学校学習指導要領』株式会社東洋館出版社
- ・『第二次宮崎県教育振興基本計画』宮崎県教育委員会
- ・『小林市小中一貫教育基本計画』小林市教育委員会
- ・『平成24年度 調査報告書（第29号）』小林市教育研究センター
- ・吉田裕久（広島大学教授）『初等教育資料8月号』（2013.7）
- ・木原俊行（大阪教育大学教授）『初等教育資料12月号』（2011.12）
- ・国立教育政策研究所『全国学力・学習状況調査の4年間の調査結果から今後の取組が期待される内容のまとめ～児童生徒の学習指導の改善・充実に向けて（小学校編）』（平成24年 教育出版）

#### 【研究同人】

所長	佐藤 勝美	(小林市教育委員会教育長)	班長(普及)	秋岡 裕子	(小林市立栗須小学校 教諭)
主任指導主事	東 宏太郎	(小林市教育委員会学校教育課教育指導監)	副班長(普及)	財津新一郎	(小林市立野尻小学校 教諭)
事務職員	富満 聖子	(小林市教育委員会学校教育課主幹)	研究員	村岡 貴博	(小林市立小林小学校 教諭)
指導主事	岩切 淳	(小林市教育委員会学校教育課指導主事)	研究員	新名 真紀	(小林市立細野小学校 教諭)
指導主事	隈元 正敬	(小林市教育委員会学校教育課指導主事)	研究員	赤嶺 恭子	(小林市立東方小学校 教諭)
主任研究員	大牟田 勇	(小林市立東方小学校 教頭)	研究員	肥後 高史	(小林市立三松小学校 教諭)
運営委員	黒木 義昭	(小林市立永久津小学校 教諭)	研究員	勝吉 千穂	(小林市立須木小学校 教諭)
副運営委員	一木 季次	(小林市立南小学校 教諭)	研究員	河野 義和	(小林市立小林中学校 教諭)
班長(系統)	松吉 啓二	(小林市立西小林小学校 教諭)	研究員	浅田 肇	(小林市立細野中学校 教諭)
副班長(系統)	市橋彦司郎	(小林市立西小林中学校 教諭)	研究員	本蘭 理子	(小林市立東方中学校 教諭)
班長(活用)	内山田博文	(小林市立紙屋小学校 教諭)	研究員	武田 詠子	(小林市立三松中学校 教諭)
副班長(活用)	原屋敷 貴子	(小林市立永久津中学校 教諭)	研究員	岩崎 香恵	(小林市立野尻中学校 教諭)